

〈書評〉

松本和也著『太宰治の小説表現』（パブリック・ブレイン、二〇二二年）

安部 水紀

太宰治の作品を読む時、誰もが感じたことがあるであろう「太宰治が自分に語りかけている」という感覚。私
が太宰治の虜になったのも、彼のこの言葉のトリックに見事引っ掛かってしまったからだ。まるで太宰治が自分
にだけ打ち明け話をしているようなあの語りは、私たちを一瞬で物語に引き込んでいき、離さない。私たち読者
は太宰治が語る作品たちを太宰治の実体験だと信じて疑わないのだ。本書ではそのように、太宰治の作品につい
て「これは太宰治の実体験に即している」と感じてしまう読書体験について言及している。具体的には、「千代
女」、「カチカチ山」、「女の決闘」、「春の盗賊」を取り上げ小説表現による工夫や仕掛け、効果について分析する
ことで、読者の感じている印象についての要因を明らかにしている。

はじめに「千代女」について取り上げている。本書では『千代女』は太宰治の書くことをめぐる自意識が凝
縮された一編だと述べており、太宰治が「なぜ書くのか」という問いについて「こたえ」ている「太宰治の小

説論」であると考察している。作中の語り手が太宰治らしさを帯びることで、太宰治と語り手が同化し、現実世界の読者は作中読者と同化するというのが本書で述べられている小説表現のひとつだ。しかし私は、太宰治に語りかけられているという感覚は、小説表現のトリックだけによるものではないと感じた。「千代女」においては表現だけに着目しては、太宰治と語り手を同化させることはできないのではないか。「千代女」から太宰治に語りかけられているようだと感じるには太宰治のことを理解しようと読者が太宰治に直接アクセスするというプロセスが必要となる。現に本書でも、太宰治の他の作品や「千代女」の発表などのタイミングを根拠として、「千代女」は「太宰治の書くことをめぐる自意識が凝縮された一編である」と考察している。太宰治のことを理解した人だけが、太宰治の語りのトリックを受け取ることができるのではないか。つまり、「千代女」に関しては太宰治に直接アクセスしなければ、私たちが作中読者に同化することも、太宰治が「和子」に同化することも難しいと考えられる。太宰治の背景を知っているからこそ、私たちは作中の「和子」を太宰治に同化させ、太宰治自身の言葉であるからこそ、私たちは「和子」から太宰治を感じてしまうのだ。

さて「千代女」から太宰治の小説論に関する自意識を読み取ることができるとまとめたが、「春の盗賊」でも太宰治の「小説の筋」についての考えが語られている。「春の盗賊」における「どろぼうに見舞はれた」という出来事は、書くことに対して語るための装置である。「どろぼうに見舞はれた」という出来事は「フィクション」ではあるものの「リアリティを付与」させたものになっている。また、「私」という一人称を作中で用いることについてのリスクに触れながらも「私」という一人称を用いて語りは続けられている。これは、完全なる「フィクション」と読者が思わないようにする工夫なのではないか。語り手「私」や「どろぼう」、「家内」までも使い

語ってきた書くことに対する自意識、これ自体は「フィクション」ではない。このように考えると、「千代女」と「春の盗賊」における「私」と「作中読者」の関係性は類似しているように感じる。どちらの作品からも語るための工夫が感じられる小説表現には本当に感服させられる。

本書を拝読し、小説表現で特に私が啓発されたのが「カチカチ山」だ。表現の工夫に着目することで「カチカチ山」全体の構造を知ることができた。本書では、「カチカチ山」の語りは二重構造になっていると述べられていた。二重というのは、「父」と「娘」の会話を語る「私」の語りを指し、二重の構造になっていることによって、「父」と「娘」の会話について語る「私」と会話しているような気分になる。「私」はメタ・レベルに位置することで「より現実世界に近く感じられるような効果」があり、「語りかける」ことと「パロディの展開」を同時に可能にしたのは、メタ・レベルに位置している語り手がいるからである。そして、「私」はパロディの物語を展開し、それに読者を引き込むための重要な装置であったのだ。本書では、「私」が読者に対して小説外にアクセスするように促したり、読者自身の経歴を振り返るように促したりと、読者が参加するような仕組みになっているとも述べた。会話というのは本来、相手が聞いて返事することで成り立つものである。小説には作中の世界があり、私たちはあくまで読者であるためそれぞれの世界が交わることは難しい。しかし、それを太宰治は小説の中で可能とさせたのだ。

「作中読者は語り手「私」の語りを促し、聞き、持続・展開させる」という小説において「重要な装置である。」と述べている。ここだけ聞くと、「カチカチ山」における読者と「女の決闘」における読者は似ているため、「私」の語りも似ているのではないかと考えるだろう。そこで、「カチカチ山」と「女の決闘」における読者を比

較してみた。「カチカチ山」の場合は、読者に「カチカチ山」を思い起こさせた上で、太宰治なりの「カチカチ山」を展開させていったのに対し、「女の決闘」はある程度の説明をした上で「本来の文脈に関する知識に依存したパロディではない旨を言明し」てから展開させている。また、「カチカチ山」は「私」の誘導したい展開に持っていくために、読者に対して小説外にアクセスするように促したり、読者自身の経歴を振り返るように促したりしていたが、「女の決闘」では読者に「解釈Ⅱ充填を促し」、読書の中にもまた新たな「女の決闘」を創り出そうとしている。「パロディ」「語り」という共通点がありながらも、読者にもたらす効果が大きく異なっていることがわかる。つまり、語りによって読者の在り方も大きく左右されていたのだ。

本書を読むことで太宰治は目的によって語りを使い分け、それによって受ける読者の印象を左右しているのではないかということに気付くことができた。作中の語り手を使って自らの考え、思いを読者に伝えていく場合には、読者の太宰治を彷彿させるような語りをする。物語を展開させたい場合には、作中の語り手を展開のためのスイッチとして利用し、読者も語りによって物語に引き込んでいく。そして、語りによって読者に「解釈Ⅱ充填を促し」、読者の中に新しい形でまた別の作品を作るように促していくような作品もあった。

しかし、どれも語りの工夫が素晴らしく、私たちは作中読者と同化せずにはいられない。気付けば作中の語り手に対してつい声に出して返事をしそうになってしまう。太宰治の語りには、相手への理解を促し、そしてそれに対して相手の中で返事をし、次の語りへと繋げているような工夫も感じられた。語りによって読点の数やタイミングなども異なっており、これはひとつひとつを読者に落とし込むための『間』の工夫とも言えるかもしれない。読点の数によって、私たちは語りを脳内再生する上でのリズムを左右され、印象も異なる。ひとつひと

つ丁寧に語るのか、切羽詰まったように語るのか、物語調のように語るのか。読点の工夫から、私たちはより太宰治の語りの息継ぎまで鮮明に想像することができ、語りかけられているといった読書体験はより強くなるだろう。私自身も本書を読むことで、太宰治の小説表現についてより興味が湧き、もっと調べてみたいという気持ちになった。ただ漠然と感じていた「語りかけられる」という小説体験は、さまざまな仕組みによって感じるように仕向けられていたことがわかった。これは、私が太宰治を読む上で新しい視点であり、かなりの発見であった。太宰治をどこかで身近に感じてしまっていた私は、そのトリックが明かされたことで少しの寂しさを感じたのだが、それ以上に小説表現の面白さを知ることができた。卒業論文を書く前に出会っていたら、テーマが変わってしまっていたかもしれない。きっと本書を手にとった人は、読書体験だけでなく、太宰治の小説そのものを違った視点で楽しめるようになるだろう。私のように。